

<b>B-3</b>					
主題		車いすでの生活から歩けるまでになった報告			
副題		「歩くこと」は「生きること」			
キーワード 1	自立支援	キーワード 2	歩行が難しい	研究(実践)期間	4ヶ月
法人名・事業所名		社福) マザアス グループホームおがわ			
発表者(職種)		白石綾香(ケアリビング課課長)			
共同研究(実践)者		保谷康能(UR)、常木睦子(職員)、斎藤朋子(職員)、他7名			
電話	042-349-0160	FAX	042-349-0161		
事業所紹介	グループホームおがわは、定員18名の2ユニットの事業所で、平均年齢は83歳、平均要介護度は3.3となっています。住所は小平市ですが、最寄り駅は西武拝島線「東大和市駅」で、ホームの近くに路線バスも通っており交通の便は良く、また近隣には公園や学校などもあり、生活しやすい環境の中でケアをしています。				
<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>Y様、92歳、女性。自立度は高い方であるも、2021年12月17日起床時にトイレへ行くとして転倒。右足の痛みがありT病院へ救急搬送となった。検査の結果、右足大腿骨にひびが入っている事が分かるが、ホームへ入居する前に交通事故に遭っており、右足にボルトを入れる手術をしていたため、今回は手術適用外との事で温存治療となり入院となった。しかしY様は病院という環境が嫌いなため、常にベッドで寝ており、食事量も低下、リハビリにも拒否がある為、病院側と相談し、ホームの環境に戻す事がご本人にとって必要との判断から2週間ほどで退院となった。</p> <p>退院当初は、トイレでの立位はかろうじてできる状態で、体重低下により背骨が出てしまい、車いすに当たる事で痛みの訴えが強く、職員が常に関わらないといけない状態となった。そのため痛みの緩和ケアを検討・実施。その後は、自分が歩けない事や大好きな入浴がシャワーだけという事に対しストレスとなり、表情が乏しくなったことから、少しでも歩ける状態まで回復を目指す事が課題となった。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>Y様の状態を見ながら、少しでも自分で歩ける状態にまで回復させる事で、Y様のストレスの緩和や意欲の向上が図れると考え、実践する事とした。</p> <p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ケアマネやフロアーリーダーを中心にY様の状態を見ながら医師に確認後、意見を基に検討し、まずは3歩程度歩く事から始め、次のステップとして歩行器を使用して日中過ごす事の多</li> </ul>					

いりビングから一番近いトイレまでを歩く、最後のステップとしてフロアー内を1周歩くと少しずつ距離を伸ばし実施をした。

#### 《4. 取り組みの結果》

- ・初めはあまり意欲的ではなかったが、3歩でも歩けるようになると自信がつき、歩行器を使用して歩くようになってからは、順調に歩ける距離を伸ばせるようになった。
- ・体力がついた事で、動く時間も増え、食事摂取量は入院前まで回復。それに伴い体重も戻った。
- ・現在では、自分から「天気も良いし、歩こうか」とフロアー内を歩くまでに回復し、表情も以前のように豊かになっている。

#### 《5. 考察、まとめ》

- ・早い段階でY様が何をストレスと感じ、どうしたいのかを見極めた内容を職員間で検討し、実施する事で、スピード感を持って行えた事が今回の実践の成功につながった。
- ・ご利用者の持っている機能や可能性を引き出す事が「自立支援」において重要と気づいた。
- ・職員個々では難しい取り組みでも、チームとして一丸となり、ご利用者を支えるための支援を検討し、実施をしなくては実現しない事だと感じた。

#### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

#### 《7. 参考文献》

特になし

#### 《8. 提案と発信》

要介護高齢者が認知症を有していても、また年齢を重ねてもアイデンティティを維持するためには、どのようなケアが必要なのかを職員間で連携しながら見極め、検討し、そして実践していく事が介護の基本である「自立支援」につながるのだと本発表を通じて改めて、他事業所に発信をしていく。